

告示	番号	34	神経・筋疾患
	疾病名	先天性ヘルペスウイルス感染症	

先天性ヘルペスウイルス感染症

せんでんせいへるべすういるすかんせんしょう

概念・定義

新生児単純ヘルペスウイルス (herpes simplex virus: HSV) 感染症は、分娩前後の HSV による感染症。水疱などの皮膚病変、眼球・口腔粘膜病変に加えて、病型によっては脳炎、肝障害などの臓器病変を合併する。ウイルス培養、HSV 遺伝子同定により診断される。高用量のアシクロビル静注療法が行われるが、致死率、神経学的後遺症率とも高い。

症状

しばし出生後 7～10 日以内に発病する。全身型、中枢神経型、表在型（皮膚、眼球、口腔粘膜に局在）などに分けられるが、全身型の発生頻度が最も高い。皮膚病変（水疱、瘢痕性病変）は病型にかかわらず約半数の患者で認められる。全身型は、発熱、活気・哺乳力の低下、皮疹・口内疹で発症、肝脾腫・黄疸、呼吸障害も出現する。中枢神経型では、けいれん発作、呼吸障害、脳脊髄液の細胞増多・蛋白濃度上昇、頭部 MRI 異常がみられ、皮膚・軟膜病変を示さない場合もある。新生児の眼、口

腔、鼻腔、血液、水泡からのウイルス培養、HSV 遺伝子の PCR 同定により診断する。中枢神経型では脳脊髄液での検査が必要となる

治療

高用量のアシクロビル療法を行う（1 日 3 回に分けて静注を 14～21 日間継続）。加えて輸液、呼吸補助、けいれんコントロールなどもある。無治療での死亡率は 70～80%（全身型は 60%）だが、アシクロビル治療により死亡率は 30%前後に低下する。中枢神経型では約 2/3 の症例に神経学的後遺症が残り、小頭症、水頭症、水無脳症、脳内石灰化などがみられる

抜粋元：http://www.shouman.jp/details/11_23_57.html